繁二郎先生そして周三先生

安森敏隆

私にとって、和田先生は常に繁二郎先生であり、周三先生であった。おりおり出す先生への手紙や葉書も、その時々、繁二郎先生であったり、周三先生になったりする。

一九六〇（昭35）年、私は立命館大学文学部日本文学科に入学した。そして以降、先生は繁二郎先生であり、周三先生でもあった。

おもえば、私が立命館大学にお世話になるきっかけは、その前の広島県立三次高校にあったのではないかと、最近よく読み返すようになった倉田百三の『出家とその弟子』『愛と認識との出発』や中村憲吉の『林泉集』・『軽雷集』の短歌を読みながら思うようになった。母校の三次高校の校門をはいると、すぐ正面に、

少年のわれ山河に親しみて此処に学べり二十年まへは

の、中村憲吉の歌碑があり、そして、その右奥の方に倉田百三の

青春は短い
宝石の如くにして
それを惜しめ

という、『愛と認識の出発』の改訂版の序文からとられた大きな文学碑が建っている。文芸部員の一人でもあった私は、この二人の先輩の文学者の碑を熱い思いで見ながら三年間、霧のふる三次の町を自転車で通ったものである。そして当時の「国語」の担任であり、文芸部の顧問であり、有名な歌人でもあった山広実美（旧姓・伊藤）先生が立命館大学の出身（あとでわかったことだが、和田先生、白川静先生より一、二年先）であられたことにも大いに影響を受けて、立命館大学に入学した。

ふと見あげると、作家の高橋和巳と哲学者の梅原猛がいた。また歌人の和田周三と国崎望久太郎がいた。ともに「先生」として私の前にあらわれたのである。

小説を書き、評論を書き、短歌をうたうようになった。なかでも私は五七五七七の「短歌」のとりこになってしまった。時、あたかも一九六〇年の前衛短歌運動のはなばなしい時であった。先輩に黒住嘉輝と清原日出夫の学生歌人がいてはげましてくれた。その年の十二月五日午前三時、「ぼくのためのノート」を書き、国学院大学の岸上大作が自殺した。「恋と革命のために死ぬ!!」という遺書が強烈に脳裡に焼きついてしまった。友人の北尾勲（現在、「ヤママユ」）と三年生の時、西日本の学生に呼びかけて機関誌「マグマ」を創刊した。顧問に和田周三・国崎望久太郎・塚本

邦雄・岡井隆・高安国世の各先生になってもらった。学生は立命館大学を中心に、同志社大学、同志社女子大学、京都大学、京都女子大学、大阪女子大学、関西学院大学、岐阜女子大学、鳥取大学、広島大学、山口女子大学、尾道短期大学等から五、六十名あつまった。それから、四回生になって、あまりに各地に分散し過ぎているので京都の大学だけに限定して雑誌「雲と靴と」とを出すことにした。この時は和田先生に相談して、国崎望久太郎（立命大）、高安国世（京大）、田中順二（同女大）の四人の先生に顧問になっていただいた。さらに、大学院になった一九六四（昭40）年、和田周三先生、国崎望久太郎先生を顧問として立命短歌会を創設し翌年の七月十日「立命短歌」（題字　末川博）を創刊することになったのである。（この時以来、「立命短歌」の雑誌は終刊号まで現在、京都歌人協会の役員をなさっている掛川利雄先生にお願いして、安く印刷してもらったものである。）その創刊号の巻頭には和田周三の歌号で次のような「はじめに」の言葉をいただいている。

短歌滅亡論は地平に消えた。短歌定型の成立が、古代天皇制下の現実に規制されているという謬論も、それだから短歌は駄目だという児戯に類する論議も遠くなった。かえって、定型の強みと、定型の可能性はにわかに注目を集めている。

短歌は、若い人々の今日的な問題意識や、現実感の上にたって、その生命のリズムを形象することができる。われわれはそれに自信をもっている。

われわれはまだ表現技巧の面で練達しているとは言い難い。また実感の燃焼が十分であるとも言えないが、若い生命の躍動と、未来への意志は豊潤である。今後、この豊潤の上にたって、ますます自己を凝視し、さらに日常的形而下的な自己を超克して、より真実なる詩的世界の創造に向うであろうことを期待している。

短歌の可能性は無限である。私は諸君たちとともに、歩を進めてゆくことに、限りない誇りと喜びとをいだいている。

一九六五・六・二八　　和田周三

私たち、創刊メンバーは、この力強い言葉に、どんなに勇気づけられたことであろうか。後輩に田中富夫君や清水怜一君や阿波喜義君がいた。月、二回の歌会と研究会をもち、多忙の中をほとんど先生は毎回のように出席下さり、御指導たまわったものである。そして、コンパや「立命短歌」（一年に一、二回の発行で十二号まで続く）刊行の際にはいつも多大のカンパをいただいたものである。そして、二号からは、作品を寄稿して下さったものである。ちなみに「立命短歌」四号（一九六七・六・一の発行）には「学園にて」と題した次のような歌が載っている。

校門を入りし目を射るつつじの朱粗野なりすでにきざしくる違和

ＰＲの立て看板の逞しき誤字なおさんに細きわがペン

校庭にマイクの声の破れひびきわだつみの像逆光に立つ

校庭の喧噪ややに慣れたりと艶ある頬を赤らめ語る
一人のリフトの中の許されし静けさによき明度と思う
校庭に出ずればたぎる陽の渦に群れなす君らをかきわけて
行く

この朝をにわかにあせしつつじの花わが関わらぬ嘆きはそこに

一九六〇年代後半における広小路学舎の学園風景の中にたたずむ一人の学者であるおのれの姿を、もう一人の歌人の〈眼〉でみごとに活写されている。

そして私は、昨年（一九九八）の秋、『斎藤茂吉短歌研究』（世界思想社）によって、はからずも立命館大学から「学位」をいただいた。入学以来、学者として三十余年間あたたかく御指導下さった和田繁二郎先生として、あの猛暑の中で五〇〇頁ばかりの拙著を全部お読みいただき、各頁にいっぱいの付箋を貼って御指導下さり、最後に審査して下さったことを心より感謝する。繁二郎先生そして周三先生、今度は天国からみまもって下さい。

繁二郎そして周三とふ
ふたりもて
をしへたまひしとはのまなざし　　敏隆

（やすもり・としたか　同志社女子大学教授）

故 和田　繁二郎　先生　追悼